

# 飢饉がささやかれる中、送還難民流入

— 予定を前倒しで「緑の大地計画」完遂急ぐ

PMS (平和医療団・日本) 総院長 / ペシャワール会現地代表 中村 哲

## 二〇〇〇年なみの異常気象

みなさん、お元気でしょうか。当地は急に冷え込み始め、川沿いの水は冷たいです。相も変わらず河の仕事ですが、今年は特別に寒風が骨身に沁みます。

異常気象です。昨冬は降雪量が非常に少なく、春先に少し降ったものの、洪水となつて消えてしまいました。五月から現在までほとんど雨がありません。そのため、川の水が極端に少なくなり、小麦の播種ができないうちが増えています。既に一〇月には、厳冬期並みの低水位を記録し、天水に頼る地域の収穫はことごとく壊滅、大川川沿いでは取水できず、飢饉がささやかれています。大干ばつが襲った二〇〇〇年の状態に酷似しています。

## 難民であふれるジャララバード

悪いことに、パキスタンから送還される難民の問題があります。その数、一〇〇万から一五〇万人と言われ、トルハム国境だけで毎日七千家族が送還されると伝えられました。一〇月、アフガン政府は、これら難民をいったんジャララバードに留め置く方針を打ち出しました。これに加え、北部のクナール州やナンガラハル州南部・スピンガル山麓からの国内避難民があります。

ジャララバード市内は人であふれています。難民キャンプから買物にくる人、職を求める人、知り合いを訪ねる人、物乞いをする人、借家を探す人、とりあえず動き回る人、これらを客にする露天商やリキシャが加わり、信じられないような雑踏が出来あがっています。



雪が薄く山肌が見える、積雪のケシュマンド山脈。しめきり堤工事現場から撮影 (2016年2月16日)

市の近郊、特に北部のベスード、シエイワ、カマ郡は、たちまち人口密集地帯となつてしまいました。川沿いやガンベリ沙漠でも、避難民のテントが林立し始めています。

難民流入で治安が悪くなった訳ではありませんが、無政府状態です。麻薬生産は、「アフガン全体で約四割増加」と伝えられ、少しお金と教育がある都会の若者は、祖国を見捨て、欧米諸国へ逃れていきます。

PMSでは、この動きを危機的にとらえ、予定を前倒しで「緑の大地計画」完成を急ぎ始めています。新たに着工したミラーン堰対岸地域（マルワリードII）だけでなく、計画が延期されてきたカシコート延長水路（九・八km）、バルカシコート堰らの早期実現を目指しています（p4写真）。

### 難民が帰り、暮らせる故郷

しかし、悲惨なことばかりでもありません。

### 新しく移住してきた難民の村落



ガンベリ沙漠に難民たちの小屋が見える。手前はPMSのガンベリ農場（2016年10月25日）

ん。現在の作業地（ミラーン対岸地域）では、着々と取水堰と用水路の建設が進められ、八〇〇畝の農地回復を目指し、多くの村民に安堵感を与えています。多くの難民が帰農し始めました。

「いつでも帰れて、暮らせる故郷！」

この状況の中では、それが贅沢と思えるほど貴重なものです。パキスタンから戻った難民たちは、口をそろえて感謝します。

同地の四カ村（コーティ、タラーン、カチャレイ、ベラ）の三万人は、PMSに将来を託し、強い協力態勢が築かれています。特に、今冬に取水堰の仮工事が成れば、長い間苦しめられてきた洪水の危険が遠のき、耕作地が倍増、安定した農業が全域で保障されるからです。

この作業地の対岸では、マルワリード用水路の最後の仕上げとも言える工事が行われています。全長一・五kmの主幹排水路で、年内に開通予定です。既に数百ヘクタールの湿害地が一掃され、小麦の作付けが保障されています。足かけ六年の難工事でしたが、決着が近づいています。完成後に詳細を報告します。

### 堰板方式の砂吐きが威力

去る一〇月に竣工したミラーン堰は、異

常気象による渇水で、竣工直後に取水困難に陥りました。しかし、堰板方式の砂吐きが絶大な威力を発揮しました。わずか二段の堰板（四〇cm）でたちまち水位を回復、流域一〇〇畝が隈なく潤された上、新たに同流域に加わったタプー（五〇〇畝）にも行きわたったのです。これで、冬小麦の収穫に不安なく、ミラーン流域とタプー流域の水争いは消滅しました。見かけは野暮ったいけれど、これは紛れもなく「可動堰」



PMSが用水路建設を始める前は、干ばつ地でもよく育つ写真のようなケン畑が多く見られた。用水路開通後は消滅し、米や麦が作られている。



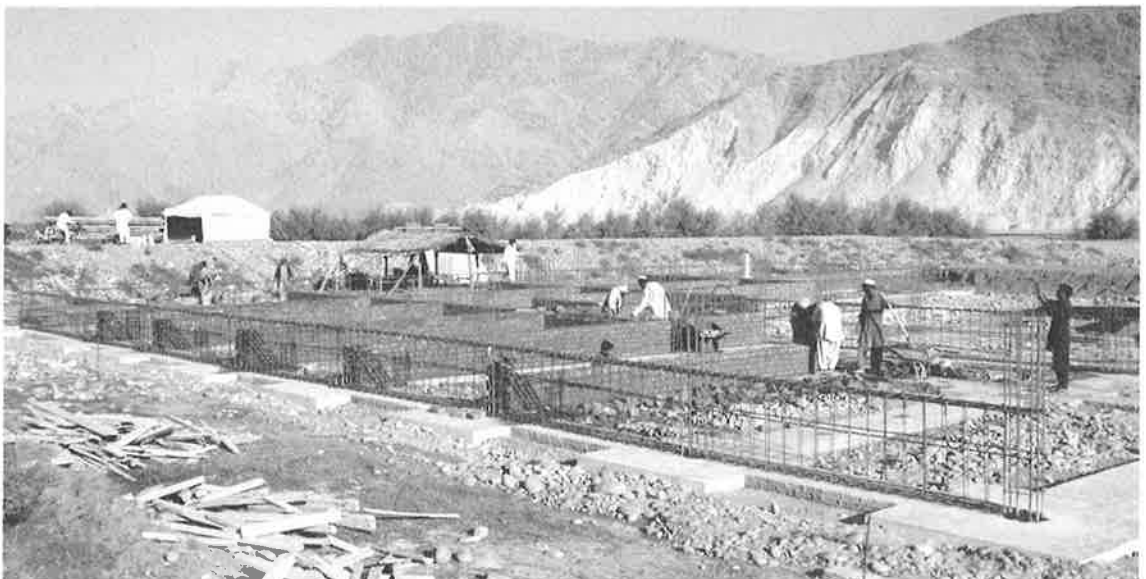
カシコート既存水路。堰からの取水可能量に対して既存水路の容量は半分以下。外壁の傾斜が急で幅も狭いので拡張工事により容量が増大し、飛躍的に農業生産は上がる（2013年7月8日）



洪水で崩壊したコンクリート突堤のバルカシコート既存水路。突堤の先端が洗掘され水が取水口に流れなくなり、村民による堰上げの跡が見られる（2015年10月14日）



ミラーン掘完工式典で「 پاکستانからの強制帰還難民があふれ、南部では戦火がやまず、北部ではクナル州からの干ばつ避難民、外国団体は引き上げ、我々は最悪の時を過ごしている。この中で、アフガン人自らの手で、自らの方法で、自らの命のために力を尽くす、そのことが偉大なのだ」と強調した中村医師（2016年10月3日）



ミラーン掘の隣に建設中の人材育成訓練校（FAO共同事業）



用水路現場付近の村の子供たち

(P.7写真下)、この時ばかりは、改めて先人の知恵に感謝しました。異常低水位にも拘わらず、PMSの建設した八カ所の取水堰・用水路は、全て正常に機能し、住民に動揺はありません。

**二万本のオレンジに希望**

ガンベリ農場のオレンジ園では、五年目にして、やっと「結果」が始まりました。「二

万本分が出荷できるようになれば、さぞ壮観」と、農業部は胸を膨らませています。

アフガニスタンといえば、爆破事件、治安悪化、米軍の誤爆、政局の混乱、テロ対策、国際支援の失敗、欧州への「難民」――等々の報道ばかりで、このところ辟易しています。大きな元凶である早魃と飢餓は、余り問題になりません。きっと私たちは、報道で合成される世界とは別のところに居ます。

飢えた人々に必要なのは、政治議論やテロ対策ではなく、パンと水です。私たちの仕事が行き場もなく途方に暮れる人々にとって、一つの希望となり、励ましを与え続けることを祈ります。

ここで目にする水路も堰も、豊かな実りも、全て良心的協力の結晶です。それがどれだけ人々に安らぎを与えているか、貧しい言葉では伝えきれません。日本も決して明るい世相ではありませんが、ほとんど見捨てられた人々への、変わらぬ祈りと温かいご関心に感謝します。

事業は世代から世代へ、氷河の水が絶えるまで続けられます。現地PMS一同もまた、祈りを合わせ、この仕事を自らの励みとし、更に意気軒昂です。

良いクリスマスと新年をお迎え下さい。

二〇一六年一月二日  
ジャララバードにて



中村 哲：九州大  
学医学部卒。専門  
は神経内科（現地  
では内科・外科も  
こなす）。国内の  
病院勤務を経て、

一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。

二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百カ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通した。ダラエヌール診療所の年間診療数四万二七二二人（二〇一五年度）。